



6/4

Daniele RUSTIONI

Conductor

ダニエーレ・
ルスティオーニ
指揮

©Davide Cerati

1983年ミラノ生まれ。フランス国立リヨン歌劇場およびトスカーナ管で首席指揮者を務め、オーケストラとオペラの両分野において彼の世代で最も目が離せない指揮者の1人である。2017年9月に就任したリヨン歌劇場ではブリテン《戦争レクイエム》、ヴェルディ『マクベス』『ドン・カルロ』などの上演が話題を呼んだ。これまでにバイエルン州立歌劇場、ミラノ・スカラ座、トリノ・レージョ劇場、フェニーチェ劇場、ロイヤル・オペラ・ハウス（ロンドン）、オペラ・バスティーユ、メトロポリタン歌劇場、チューリヒ歌劇場などに登場。またサンタ・チェチーリア国立アカデミー管、ロンドン・フィル、バイエルン国立管、アイルランド国立響、BBC響などを指揮。

2014年に日本デビュー、これまでに九響、東響、大阪フィルを指揮。また東京二期会オペラ劇場『蝶々夫人』『トスカ』（ともに管弦楽／都響）に登場した。都響の定期演奏会には2017年2月（《幻想交響曲》ほか）に続いて2回目の登壇。

Daniele Rustioni was born in Milano in 1983. He is Principal Conductor of Opéra National de Lyon and Orchestra della Toscana. Rustioni has appeared at opera houses including Bayerische Staatsoper, Teatro alla Scala, Teatro Regio Torino, Teatro La Fenice, Royal Opera House (London), Opéra Bastille, Metropolitan Opera, and Opernhaus Zürich. He has performed with orchestras such as Orchestra dell'Accademia Nazionale di Santa Cecilia, London Philharmonic, and Bayerischer Staatsorchester. Rustioni conducted *Madama Butterfly* and *Tosca* at Tokyo Nிகikai Opera Theatre in Japan.



第857回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.857 B Series

Series

サントリーホール

2018年6月4日(月) 19:00開演

Mon. 4. June 2018, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● ダニエーレ・ルスティオーニ Daniele RUSTIONI, Conductor

ヴァイオリン ● フランチェスカ・デゴ Francesca DEGO, Violin

コンサートマスター ● 崎谷直人 SAKIYA Naoto, Concertmaster

※本公演に出演を予定していたコンサートマスターの矢部達哉は、急病のため出演できなくなりました。
代わって、崎谷直人（神奈川県フィルハーモニー管弦楽団ソロ・コンサートマスター）が出演いたします。

モーツァルト：歌劇『フィガロの結婚』序曲 K.492 (4分)

Mozart: Overture to "Le Nozze di Figaro", K.492

ヴォルフ＝フェラーリ：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.26 (37分)

Wolf-Ferrari: Violin Concerto in D major, op.26

- | | |
|-------------------------------|--------------|
| I Fantasia | ファンタジア |
| II Romanza | ロマンツァ |
| III Improvviso e Rondo finale | 即興とロンド・フィナーレ |

休憩 / Intermission (20分)

R.シュトラウス：交響的幻想曲《イタリアより》op.16 (45分)

R.Strauss: Aus Italien, op.16

- | | |
|--------------------------------|-----------|
| I Auf der Campagna | カンパーニャにて |
| II In Roms Ruinen | ローマの廃墟にて |
| III Am Strande von Sorrent | ソレントの海岸にて |
| IV Neapolitanisches Volksleben | ナポリのひとの生活 |

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

シリーズ支援：  明治安田生命

助成：文化庁文化芸術振興費補助金

(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。



Francesca DEGO

Violin

フランチェスカ・デゴ
ヴァイオリン

レッコ (イタリア) 生まれ。2008年パガニーニ国際コンクールにおいてイタリア人女性初の入賞者となり、最年少でエンリコ・コスタ博士記念賞を受賞して注目を集めた。これまでにノリントン、ホグウッド、ジェルメッティらの指揮で、ケルン・ギュルツェニヒ管、ロイヤル・フィル、フィルハーモニア管、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィルなどと共演。2012年にドイツ・グラモフォンと契約、『パガニーニ：ヴァイオリン協奏曲第1番／ヴォルフ＝フェラーリ：ヴァイオリン協奏曲』（ルスティオーニ指揮バーミンガム市響）など3枚のアルバムをリリース。使用楽器は1697年製フランチェスコ・ルジェーリと1734年製グアルネリ・デル・ジェス「Ex.リッチ」（レオンハルト・フローリアン楽器商会より貸与）。

Francesca DeGo was born in Lecco, Italy. In 2008 she garnered widespread attention for being the 1st Italian female prizewinner of “Paganini Competition”. In addition she was awarded the “Enrico Costa” prize for having been the youngest finalist. DeGo has performed with orchestras including City of Birmingham Symphony, Gürzenich-Orchester Köln, Philharmonia Orchestra, and Filarmonica Arturo Toscanini under batons of Rustioni, Norrington, Hogwood and Gelmetti, among others. She plays Francesco Ruggeri (1697) and ex-Ricci Guarneri del Gesù (1734) courtesy of Florian Leonhard Fine Violins.

モーツァルト： 歌劇『フィガロの結婚』序曲 K.492

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756~91) のオペラ『フィガロの結婚』は1786年に初演された。オペラの原作は、当時のフランスで物議を醸していた劇作家カロン・ド・ボーマルシェ (1732~99) の筆になる。頑迷で好色な領主に、使用人たちが知恵を駆使して立ち向かうという挑戦的な筋書きは、フランスはもちろん、モーツァルトのホームグラウンドであるオーストリアでも、権力者である貴族たちの感情を逆なでした。それでも、オーストリアの都ウィーンの宮廷で詩人として働いていたロレンツォ・ダ・ポンテ (1749~1838) が、頓智を働かせてオペラ用に台本を仕上げ、さらに時の皇帝ヨーゼフ2世 (1741~90) を説き伏せたおかげで、ようやく作品の上演が許される。

というわけで、そのようなオペラのためにモーツァルトが仕立てた序曲も、きわめて機智に富んだものとなっている。一聴したところ、オペラ上演の中心であった宮廷劇場に集う貴人好みの華麗さや愉悦に満ちているものの、耳を傾けてみると一筋縄ではゆかない。

たとえば序曲の冒頭、身分制社会の中を巧みに立ち回る使用人の姿と重なり合うかのようにファゴットと弦楽器が細かな動きを見せるが、フレーズのまとまりは1小節+2小節+4小節=7小節という変則的なものとなっている(普通耳に心地よいまとまりは、2小節+2小節=4小節といった具合に、偶数、しかも偶数×偶数の倍数である場合が多い)。しかもこの動きに乗って有名なテーマが登場するものの、これもテーマと呼ぶにはあまりにも動きや表情の変化が激しい。

貴族社会の伝統に従うようでありながら、新たな時代の作法をしたたかに身につけていたモーツァルトと同時代人たち。そんな面々の生き方が映し出されたかのような一曲だ。

(小宮正安)

作曲年代：1785~86年

初演：オペラ全曲/1786年5月1日 ウィーン ブルク劇場 作曲者指揮

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

ヴォルフ＝フェラーリ： ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.26

エルマンノ・ヴォルフ＝フェラーリ (1876~1948) は、『4人の頑固者』(1906)、『スザンナの秘密』(1909)、『イル・カンピエッロ』(1936)などのイタリア・オペラで知られる作曲家である。一般にはオペラ『マドンナの宝石』(1911)の「間奏曲」

でおなじみといえよう。

彼はヴェネツィア生まれのイタリア人だが、父親はドイツ人で、音楽教育もドイツで受けている。また彼のオペラがイタリアよりもドイツで評価されたこともあり、作曲家として名をなしてからはほとんどミュンヘンを本拠とした。

器楽ジャンルの作品も手掛け、特に初期と後期に集中して書かれている。本日のヴァイオリン協奏曲は後期の所産で、彼の器楽作品の中では最も演奏される機会が多い。徹底してロマン派的な特質を示している点に彼の美学が窺える。

この曲が書かれた背景にはアメリカの若き女性ヴァイオリニスト、ギラ・バスタボ（1916～2002/Guila Bustabo）の存在があった。バスタボは欧米で注目されていた才媛で、アメリカ人ながらナチ政権下のドイツに留まっていた。彼女はヴォルフ＝フェラーリのオペラ『愚かな娘』（1939）に感動し、その一節をヴァイオリン用に編曲してくれるよう彼に手紙で依頼する。

しかし彼はそれを断り、代わりに本格的な協奏曲を作曲することを提案、1943年ミュンヘン近郊の自宅に彼女を招き、また手紙でもやり取りしながら、彼女の意見を取り入れて作曲を進め、同年夏にこれを完成させる。40歳年下の彼女に彼は深い愛情を抱いていたといわれ、この曲の甘美でどこか切ないカンタービレにはそれが反映されているかのようだ。初演は1944年1月7日ミュンヘンでバスタボの独奏、オズヴァルト・カバスタ（1896～1946）の指揮でなされた。

なおバスタボは、戦時中にこのカバスタやヴィレム・メンゲルベルク（1871～1951）といったナチ協力者と共演したことで（後者との共演によるブルッフやベートーヴェンの録音もある）、戦後長らくアメリカの音楽界から疎外され、ヨーロッパで演奏と教育に従事したが、躁鬱病を患って1970年に帰国、アラバマ交響楽団の楽員を務めるかたわら、ソロ活動も行った。1971年にはミュンヘンにおいてルドルフ・ケンペ（1910～76）の指揮でヴォルフ＝フェラーリの協奏曲を再演、その名演の録音も遺されている。

第1楽章 ファンタジア ニ長調 まずモルト・トランクイロ（クワジ・アダージョ）で独奏が夢見のような主題を奏する。この主題を中心にテンポの頻繁な変化を伴いつつ様々な楽想が出現、やがて変ロ短調の第2主題も独奏に出るが、緊密なソナタ形式を形作るより、場面の变化と独奏の技巧の披露に主眼を置いている点がオペラ作家らしい。

第2楽章 ロマンツァ アダージョ 嬰へ長調（調号はホ長調） たゆたうような付点リズムの伴奏上に独奏が憧れに満ちた旋律を歌う落ち着いた主部と、変化のある中間部（変ホ短調）からなる。

第3楽章 インプロヴィーゾ・エ・ロンド・フィナーレ（即興とロンド・フィナーレ） まずアジタート・コン・パッシオーネ、ロ短調、ギャロップ風の付点リズムの伴奏上に独奏が第1楽章第2主題を激しく奏して始まり、熱情的かつ即興風に進む。後半のロンド・フィナーレはアレグロ、ポイ・センプレ・ピウ・アニマンド、ニ長

調、民俗舞曲風の快活な主題とエピソードの交替のうちに独奏の鮮やかな妙技が繰り広げられ、最後近く長大なカデンツァが置かれる。

(寺西基之)

作曲年代：1943年

初演：1944年1月7日 ミュンヘン
ギラ・バスタボ（ヴァイオリン） オズヴァルト・カバスタ指揮

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、ハープ、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

R.シュトラウス： 交響的幻想曲《イタリアより》op.16

現代の聴き手がリヒャルト・シュトラウス（1864~1949）に抱くイメージとして真先に浮かぶのは、交響詩やオペラなどで、与えられた標題を当意即妙に描くことを得意とした作曲家である、というあたりだろう。もちろん間違いではないのだが、シュトラウスがワーグナー、リストに連なる、「新しいドイツ」時代を代表するような作品を世に問うことで活躍し始めるのは1890年代に入ってからのこと。1880年代においては、むしろ古典派寄り、室内楽・交響曲の作曲を本領としたブラームスに影響を受け、数々の作品を生み出していたことは、もっと知られてよい。

もちろん、ホルン協奏曲第1番（1883）、ヴァイオリン・ソナタ（1888）など、この時期に作られ、現代においても演奏頻度の高い器楽作品は数多い。その一方で、習作的な色合いが強いとはいえ、交響曲ニ短調（1880）、交響曲ヘ短調（1884）といった作品を演奏会場で耳にする機会はほとんどないのが現状でもある。

マイニンゲン宮廷管弦楽団の指揮者にハンス・フォン・ビューロー（1830~94）の推挙によって就任・活動した1885年には、ブラームスが同地で交響曲第4番を初演し、シュトラウスもその演奏に立ち会っている。翌1886年、シュトラウスは早くもマイニンゲンの職を辞し、4月17日から5月25日までイタリアを旅している。イタリア各地を巡った際に書きとめた楽想を新しい作品へと活かすにあたり、シュトラウスが範としたのはやはりベートーヴェンであった。ピアノ・ソナタ 短調（1882）では、交響曲第5番の4音モチーフを換骨奪胎して作品に取り入れたが、新しい交響的作品を作るにあたっては交響曲第6番《田園》に注目したと思われる。

ベートーヴェンの田園交響曲を下敷きにしつつも、リスト、ワーグナーの語法を採り入れながら作曲を進めたことで、シュトラウスは過去から未来へのバトンを次世代へと引き継ぐ方法論をみずからのうちに確立した。従来の交響曲と見なして演奏できるような、若き日のシュトラウスによる独特のバランス感覚が保たれているわけで、絶対音楽から標題音楽へ、交響曲から交響詩へと進んでいく作曲家・シュト

ラウスが歩む過程において、本作は前者の要素により大きな比重を置いている。

この堅固な音楽作りが、第4曲で用いられた「フニクリ・フニクラ」（後述）のように、一歩間違えればキッチュな響きに堕してしまいがちな危険を回避し、むしろ音楽全体の強力な推進力へと転化させる力を生んでいる。伝統に立脚した楽曲様式の枠内で描写的な標題を表現する「交響詩」という武器を得て、シュトラウスは1890年代のドイツで作曲家としての名声を確立することになる。

1886年の間に《イタリアより》の作曲を終えたシュトラウスは、翌1887年3月2日にミュンヘンで、みずからの指揮によって初演を果たした。この作品に「大管弦楽のための交響的幻想曲（ト長調）Sinfonische Fantasie (G-Dur) für großes Orchester」という副題が添えられたのも、交響曲でありつつも、かならずしもその在り方にあてはまらない自由な形式を与えたことの宣言であった。

交響曲ならば、冒頭楽章に大々的なソナタ形式を置くのが通例だが、本作の第1曲「カンパーニャにて」はかなり自由な三部形式であり、音楽的にはむしろ第2曲への序奏的な役割を果たしている。古代ローマの別荘地として発展し、すでに廃墟となっていたカンパーニャの様子は、冒頭のト長調・空虚5度で示される（この開始部が、すでにワーグナー『ラインの黄金』の冒頭部を思わせる）。

トランペットの主題に導かれた堂々たるハ長調で始まる第2曲「ローマの廃墟にて」では、主要な主題だけでも4種が用いられ、従来のソナタ形式の枠組みにとどまることなく、より複雑な書法に挑戦している。

第3曲「ソレントの海岸にて」では、その情景を思わせる第1主題に対比させるかのように、ドイツの民謡的な主題が第2主題に選ばれ、望郷の念が示されている、といわれている（楽曲形式的にはソナタ形式だが、再現部がかなり短くコーダを兼ねているので、A-B-Bの展開-A [コーダ] ともとれる）。

第4曲「ナポリのひとの生活」では、イタリア旅行の6年前に作曲された、ルイーゼ・デンツァ（1846～1922）によるヴェスヴィオ火山登山電車のコマーシャル・ソング「フニクリ・フニクラ」を、シュトラウスが以前から同地に存在する民謡だと勘違いして自作に採り入れてしまい、トラブルになったという逸話が有名となった。ソナタ形式の大詰めに置かれた、シュトラウス特有の遊び心に満ちた総休止と最後の3つの和音を聴けば、聴き手を愉しませるための「エンターテインメント」としての音楽語法を、シュトラウスが若い頃から身につけていたことを窺わせる。

（広瀬大介）

作曲年代：1886年

初演：1887年3月2日 ミュンヘン 作曲者指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2（第2はイングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、小太鼓、トライアングル、タンブリン、シンバル、ハーブ、弦楽5部

6/11 6/17

Oleg CAETANI

Conductor

オレグ・カエターニ
指揮

ローマのサンタ・チェチーリア音楽院でフランコ・フェラーラに師事。17歳の時、モンテヴェルディ『タンクレディとクロリンダの戦い』で劇場デビューを果たす。その後、モスクワ音楽院でキリル・コンドラシン、サンクトペテルブルク音楽院でイリヤ・ムーシンに師事。イタリア放送コンクール、カラヤン国際指揮者コンクールの勝者として、ベルリン州立歌劇場のコレペティトゥア兼オトマール・スウィトナーのアシスタントとしてキャリアをスタート。これまでに、シドニー響、シュターツカペレ・ドレスデン、ミュンヘン・フィル、バイエルン放送響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管などを指揮しているほか、ロンドン、ローマ、パリなどで定期的にオペラを指揮。2014年、『トスカ』でロイヤル・オペラ・ハウス（ロンドン）へのデビューを飾った。レコーディングも数多く、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響との『ショスタコーヴィチ：交響曲全集』（ARTS Music）は特に高い評価を受けている。都響とは2009年に初共演、今回が4度目の登壇。

At Conservatorio di Musica Santa Cecilia in Roma Oleg Caetani attended Franco Ferrara's conducting class. After studying with Kirill Kondrashin at Moscow Conservatory, he studied with Ilya Musin at the St. Petersburg Conservatory. Winner of RAI Turin competition and Karajan Competition in Berlin, Caetani started his career at Staatsoper Unter den Linden as repetiteur and assistant of Otmar Suitner. He has performed with orchestras including Sydney Symphony, Sächsische Staatskapelle Dresden, Orchestra Sinfonica di Milano Giuseppe Verdi, Münchner Philharmoniker, Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, and Gewandhausorchester Leipzig.



第858回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.858 A Series

東京文化会館

2018年6月11日(月) 19:00開演

Mon. 11. June 2018, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● オレグ・カエターニ Oleg CAETANI, Conductor

チェロ ● 宮田 大 MIYATA Dai, Violoncello

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

シューベルト:交響曲第3番 二長調 D200 (23分)

Schubert: Symphony No.3 in D major, D200

- I Adagio maestoso - Allegro con brio
- II Allegretto
- III Menuetto: Vivace
- IV Presto vivace

矢代秋雄:チェロ協奏曲 (1960) (22分)

Yashiro: Cello Concerto (1960)

休憩 / Intermission (20分)

ベートーヴェン:交響曲第5番 八短調 op.67 《運命》 (33分)

Beethoven: Symphony No.5 in C minor, op.67

- I Allegro con brio
- II Andante con moto
- III Allegro
- IV Allegro

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

MIYATA Dai

Violoncello

宮田 大

チェロ



©Daisuke Omori

3歳よりチェロを始める。第74回日本音楽コンクールを含む出場したすべてのコンクールで第1位入賞。第9回ロストロポーヴィチ国際チェロコンクール（パリ）で日本人として初優勝。桐朋学園音楽部門特待生、桐朋学園大学ソリスト・ディプロマコースを首席で卒業。2009年にジュネーヴ音楽院卒業、2013年にクロンベルク・アカデミー修了。第6回齋藤秀雄メモリアル基金賞、第20回出光音楽賞を受賞。チェロを倉田澄子、フランス・ヘルメルソンの各氏に師事。使用楽器は1698年製ストラディヴァリウス“シャモニー（Cholmondeley）”（上野製薬株式会社より貸与）、1710年製マッテオ・ゴフリラー（宗次コレクションより貸与）。

Dai Miyata was born in 1986. After age nine, he won the 1st Prize at all music competitions he participated in, including the 74th Music Competition of Japan. In 2009, he won the Grand Prix in the 9th Concours de violoncelle Rostropovitch. He is one of the best young cellists who attract people's expectation in the present age. Miyata plays Antonio Stradivari “Cholmondeley” 1698 (Loaner: Ueno Fine Chemicals Industry) and Matteo Goffriller 1710 (Loaner: Munetsugu Collection).

シューベルト： 交響曲第3番 二長調 D200

ウィーンの寄宿制神学校（コンヴィクト）で音楽の才能を伸ばしていたフランツ・ペーター・シューベルト（1797～1828）に、1813年から14年にかけて、転機が訪れる。変声期を迎え、学校の合唱児童の役割を果たせなくなったこと、また兵役を逃れる目的もあって、父親フランツ・テオドール・シューベルト（1763～1830）が教鞭をとる学校で、教師として働き始めた。そのかわり、寄宿制神学校時代から教えを受けていたアントーニオ・サリエリ（1750～1825）のもとでさらなる個人指導を受け、数々の曲を作る……。

これは、当時ウィーンでよく見られた「音楽愛好家」の典型的な活動のスタイルだった。音楽を純粋に愛するがために、それで生業を立てず、しかし音楽の腕前は人後に落ちないという存在。交響曲第3番も、もともとは音楽愛好家から成るオーケストラのために書かれたものである。なお、彼らが集った内輪での初演（公開初演は作曲者の死後はるか経ってからになる）の際にはシューベルトもヴィオラ奏者として参加したようだ。

この交響曲は、音楽愛好家の住まいに構えられたサロンで演奏されることを念頭に置いていたためだろう。いわば室内楽の延長ともいえる小ぶりの楽器編成となっており、内容そのものも室内乐的な親密さと緻密さに貫かれている。第1楽章を書き始めたものの、おそらくは五線譜が足りなくなってしまったためしばらく作業が中断してしまった、という事情も、いかにも愛好家の仕事の状況にふさわしい。

ただし、当時の音楽愛好家がいかに一流の腕前を具えていたか……さらにはその一員だったシューベルトが、やがては職業音楽家への道を進むほどにいかにも豊かな才能を具えていたか……については、この作品を聴けばよく分かる。第1楽章（アダージョ・マエストーソ～アレグロ・コン・ブリオ）は序奏付きのソナタ形式だが、重々しい序奏に続いて現れる主部の軽やかさが特徴だ。しかもクラリネットが演奏する第1主題の旋律は、後の交響曲第7番《未完成》第2楽章第2主題の後半部分との類似がよく指摘されるように、単なる軽さや明るさにとどまらない、痛切な憧れを密かに宿している。

第2楽章（アレグレット）は、シューベルトが手本としたウィーン古典派の交響曲の影響を受けた緩徐楽章。それに続く第3楽章（メヌエット／ヴィヴァーチェ）は、やはりウィーン古典派の伝統を継いで「メヌエット」と表記されているものの、内容的には、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が得意としたような、より速いテンポのスケルツォに近く、トリオ（中間部）にはオーストリアの民族舞踊であるレントラーが顔を出すという独自性に溢れている。

そして第4楽章（プレスト・ヴィヴァーチェ）は、イタリアの民族舞踊であるタランテッラのリズムに基づくソナタ形式だが、第2主題は「旋律」というより「動機」と呼んだ方がよいようなごく短いフレーズが、弦楽器と管楽器に交互に現れる。これもまたシューベルトの進取の気性であり、またそれに応えるだけの力を当時の音楽愛好家が持っていた証に他ならない。

（小宮正安）

作曲年代：1815年5月24日～7月19日

初演：公開初演（第4楽章のみ）／1860年12月2日 ウィーン

ヨハン・ヘルベック指揮 ウィーン楽友協会会員から成る管弦楽団

公開初演（全曲）／1881年2月19日 ロンドン

アウグスト・マンス指揮 クリスタル・バレス管弦楽団

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

矢代秋雄： チェロ協奏曲

美術の研究・評論家として初めて文化功労者に選ばれた矢代幸雄の第一子として、矢代秋雄（1929～76）は東京に生まれた。母がアマチュアピアニストだったため幼少の頃からピアノに親しみ、小学校入学前から既に作曲を試みていたというのだから相当な早熟である。ドイツ系の流れを汲む作曲家・諸井三郎に10歳から師事。諸井は歌曲やオペラに軸足を置いた山田耕筰らに反発し、ソナタを中心とした器楽のための作品を探求した。セザール・フランクを理想形として崇める姿勢は、矢代にもそのまま受け継がれている。しかし、東京音楽学校（現：東京藝術大学音楽学部）を志望したため、その後は主にフランス系の橋本國彦、池内友次郎に師事。同校研究科修了後はパリ国立高等音楽院へ留学し、トニー・オーバンのレッスンを受けながら、オリヴィエ・メシアンのクラスを聴講していたという。

日本に戻ってきてからは東京藝大で後進の指導にあたり、池辺晋一郎、野平一郎、西村朗をはじめ、現在全国各地の音楽大学で教授を務めている人材を数多く育成。作曲家としてはその完璧主義ゆえに極端な寡作として知られ、帰国後から46歳で急逝するまでの間に管弦楽作品は、チェロ協奏曲を含め3作（交響曲、ピアノ協奏曲）しか完成していない。

本作は単一楽章と銘打たれてはいるものの、実質的には4つの切れ目なく演奏されるセクションで構成されている。

カデンツァではじまる第1部では、作品全体を統一する3つのモチーフが提示される。すべての根源となる「第1モチーフ」（冒頭でチェロが奏でるレーファ♯-ファーレの4音）と、その第1を変形させた「第2モチーフ」

は共に、上行してから下行する音型。「第3モチーフ」は4回同じ音を続けてから下行する音型で、ベートーヴェンの交響曲第5番の冒頭モチーフを想起させる。そして各セクションのクライマックスで登場し、シグナルのような役割を果たす。これらの3つの音型は第1部のラストで、ティンパニ、ホルン、フルートへと波及していく。

ホルンとフルート以外の管楽器が加わり出すところからが第2部となり、チェロは「第2モチーフ」をもとに旋律を発展させていく。背景のオーケストラも少しずつ密度を濃くしていき、遂にオーケストラの総奏とチェロが「第1モチーフ」で拮抗するまでに至ったところで沈静化。

アルトフルートが穏やかに「第1モチーフ」を吹くところからが第3部となる。ここは緩徐楽章に相当するセクションだ。

そして急激にテンポが速くなる箇所から最後の第4部へとなだれ込み、いくつもの新しい音型が登場したかのように聴こえるが、実はほぼ全てが「第1モチーフ」を変化させたもの。全体のクライマックスにたどり着いたところでテンポが再び落ち着き、チェロのカデンツァへ。続いて作品冒頭が回顧され、全曲を閉じる。

(小室敬幸)

作曲年代：1959年夏～1960年5月1日

初演：放送初演／1960年8月14日

舞台初演／1960年9月19日 ワルシャワ

いずれも堤剛(チェロ) 岩城宏之指揮 NHK交響楽団

楽器編成：フルート2(第1はアルトフルート持替)、オーボエ、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タムタム、ヴィブラフォン、ハープ、チェレスタ、弦楽5部、独奏チェロ

ベートーヴェン： 交響曲第5番 八短調 op.67《運命》

西洋音楽史上、様々なジャンルで革新的作品を発表したルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)だが、とりわけ交響曲の分野で彼が打ち立てた功績は大きい。もともと交響曲はオペラや芝居の序曲から派生し、第1楽章や最終楽章は演奏会の開幕や終了を告げる役割を担っていた(また他の楽章についても演奏会の要所々々で取り上げられ、交響曲が現在のように全曲まとめて演奏されるというケースはかなり珍しかった)。

ところが、彼はそうしたあり方を一変させてしまった。特に交響曲第5番は、そうしたベートーヴェンの交響曲の特徴が明確に刻印された作品に他ならない。

まずこの曲については何よりも、「暗から明へ」あるいは「闘争を経て勝利に至る」という、ベートーヴェンの作品を語る際よく用いられる表現が典型的

にあてはまる。ベートーヴェンは若き日に勃発したフランス革命（1789年）に熱狂し、フランス革命の体現者としての錦の御旗を掲げたナポレオン・ボナパルト（1769～1821）に一時心酔した経験の持ち主だ。結局のところこのナポレオン崇拝は、ナポレオン本人の名誉欲や侵略者としての姿勢を目の当たりにしたことで消え去ってしまうのだが、だからこそベートーヴェンは音楽の中に純粋な革命思想の実現を試みようとした。

そうしたベートーヴェンの姿勢に共鳴したのが、市民階級である。それまで王侯貴族をはじめとする特権階級の支配下に甘んじてきた彼らは、フランス革命が大きなきっかけとなり、みずからの社会的地位向上のために立ち上がる。その際、市民階級の崇拜の的となったのがベートーヴェンに他ならなかった。たとえ現実政治の世界では、ナポレオンのような人物に裏切られることがあっても、殊音楽の世界においてそれはない。

さらに、耳の病をはじめとする様々な困難と闘いながら歩いてゆこうとするベートーヴェンの生き方そのものも、裸一貫の状態から身を起こし社会的進出を何とか遂げようとしている市民たちにとっては、みずからの規範として仰ぐにふさわしいものだった。

というわけで交響曲第5番も、ベートーヴェンの、あるいは当時の彼をとりまく市民階級の理想が溢れんばかりに詰まっているといえる。つまりはオーケストラというメディアを用い、演奏会の場において多くの聴衆と感動を分け合うマニフェストであって、それゆえ元来の交響曲が担っていたいささかお気楽な立ち位置とはまったく異なっていった内容と化した。とりわけそれが典型的に表れているのが、従来であればバラバラに演奏されてもおかしくなった第3楽章と第4楽章を切れ目なしに繋ぎ、暗から明への一大転換を成し遂げてみせた点だろう。

初演こそ、当時の演奏会の常として新作ばかりを並べた長大なプログラムのために練習時間が足りず失敗に終わったが、評価はすぐに高まっていった。またそれほどまでに、当時の演奏会の担い手となっていった市民の心の琴線に触れる作品だったのであり、やがて《運命》というニックネームが付けられていったのも頷ける。

(小宮正安)

- 第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ
- 第2楽章 アンダンテ・コン・モート
- 第3楽章 アレグロ
- 第4楽章 アレグロ

作曲年代：1807～08年

初演：1808年12月22日 ウィーン 作曲者指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部



プロムナードコンサートNo.378

Promenade Concert No.378

Promenade

サントリーホール

2018年6月17日(日) 14:00開演

Sun. 17. June 2018, 14:00 at Suntory Hall

指揮 ● オレグ・カエターニ Oleg CAETANI, Conductor

ピアノ ● 藤田真央 FUJITA Mao, Piano

コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

チャイコフスキー：歌劇『エフゲニー・オネーギン』より 「ポロネーズ」 (4分)

Tchaikovsky: Polonaise from "Eugene Onegin"

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番 変ロ短調 op.23 (35分)

Tchaikovsky: Piano Concerto No.1 in B-flat minor, op.23

- I Allegro non troppo e molto maestoso - Allegro con spirito
- II Andantino semplice
- III Allegro con fuoco

休憩 / Intermission (20分)

カリニコフ：交響曲第1番 ト短調 (38分)

Kalinnikov : Symphony No. 1 in G Minor

- I Allegro moderato
- II Andante commodamente
- III Scherzo: Allegro non troppo
- IV Finale: Allegro moderato - Allegro risoluto

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演 (青少年を年間500名ご招待)協賛企業・団体はP.53、募集はP.56をご覧ください。



お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。



FUJITA Mao

Piano

藤田真央

ピアノ

©Shigeto Imura

1998年東京都生まれ。3歳からピアノを始める。2017年大学1年在学中に、第27回クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクールで優勝。併せて「青年批評家賞」「聴衆賞」「現代曲賞」を受賞し、一躍世界の注目を浴びる。幼少の頃から全日本学生音楽コンクール（小学校の部）第1位、2016年浜松国際ピアノアカデミーコンクール第1位など受賞を重ねるとともに、ショパン国際音楽祭、アッシジ音楽祭などに招かれ演奏。オーケストラとの共演も多い。CDをナクソス・ジャパンからリリースしており、3枚目となる最新盤は『パッセージ』。

現在、特別特待奨学生として東京音楽大学ピアノ演奏家コース・エクセレンスに在学。ピアノを野島稔、鷺見加寿子、佐藤彦大に、ソルフェージュを西尾洋に師事。平成29年度公益財団法人青山財団奨学生。

Mao Fujita was born in Tokyo in 1998. In 2017 he won the 27th Concours International de piano Clara Haskil in Switzerland. This achievement earned him international attention. Fujita has won numerous awards such as 1st Prize at the Hamamatsu International Piano Academy Competition, among others. He released CDs from Naxos Japan, and his latest third album is "Passage". Fujita is studying as a special scholarship student at Tokyo College of Music. He is a 2017 scholarship student of the Aoyama Foundation.

チャイコフスキー： 歌劇『エフゲニー・オネーギン』より「ポロネーズ」

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）のオペラの中で最も広く親しまれている『エフゲニー・オネーギン』は、ロシアの近代文学の確立者アレクサンドル・プーシキン（1799～1837）の韻文小説に基づく全3幕の作品（台本はコンスタンチン・シロフスキーと作曲者自身）で、1877年半ばに着手、翌年2月に保養に訪れていたイタリアで完成をみている。

物語の舞台は1820年代のロシア。ニヒリストである青年詩人エフゲニー・オネーギンは田舎地主の娘タチアーナからの一途な愛の告白を拒絶する。時が経ち、オネーギンは公爵夫人となったタチアーナに再会、見違えるほどに成熟した彼女に今度は彼のほうから求愛するが退けられる。

本日演奏される「ポロネーズ」は第3幕の幕開けで演奏される管弦楽のみの曲。場面はペテルブルクの上流階級の集まる舞踏会であり、そこには今やグレーミン公爵夫人という高貴な身分となったタチアーナも列席している。どこかいかめしく、また絢爛たる華やかさを持った曲想に、いかにも当時のロシアの上流社交界の様子が映し出されている。その壮麗さは、まだタチアーナが田舎地主の娘だった第2幕における、彼女の家の舞踏会での「ワルツ」や「マズルカ」の素朴さとは、音楽的にも鮮やかなコントラストをなしているといえるだろう。

（寺西基之）

作曲年代：1877～78年

初演：オペラ全曲／1879年3月29日（ロシア旧暦3月17日） モスクワ

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

チャイコフスキー： ピアノ協奏曲第1番 変ロ短調 op.23

チャイコフスキーの代表作の一つに数えられるこの協奏曲は彼の初期の所産で、1874年秋に着手された。彼がモスクワ音楽院教授として活動しつつ作曲家としての名声を次第に高めつつあった頃のことである。彼はこの年の末に、出来上がった部分の楽譜を携えて音楽院院長ニコライ・ルビンシテイン（1835～81）を訪問する。初演の演奏を依頼しようと考えていたこの先輩にいち早く譜面を見せて意見を求めたのである。しかしルビンシテインは「演奏に値しない代物」と決めつけ、「ほとんどの部分を書き直す必要がある」と酷評した。作品の出来に

自信を持っていたチャイコフスキーはこうした批判に憤慨し、「一音たりとも変えるつもりはない」と激しく反論したという。

実際彼はほぼそのままの形で翌年2月に総譜を完成させ、それをドイツのピアニストで名指揮者だったハンス・フォン・ビューロー（1830~94）に送った。ビューローはただちにこの作品の独創性を見抜き、同年のアメリカへの演奏旅行の機会にボストンでその世界初演を行った。結果は大成功で、その報はロシアにもすぐに伝えられた。ロシアでもその後ペテルブルクで演奏され、さらに続いて行われたモスクワ初演ではなんとルビンシテインが指揮をとっている。ルビンシテインもこの作品の価値を再認識し、その後はすすんでこの協奏曲を演奏したという。一方チャイコフスキーのほうも他人の批判を受け入れて改訂の手を入れ、完成度の高い現行の決定稿を作り上げたのだった。

全体は3楽章構成でなるが、ラプソディックな民族的特質を大胆に取り入れることで古典的な協奏曲形式の枠を打ち破っている。それゆえアカデミックなルビンシテインから酷評されたのだろうが、まさにそうしたロシア的特質こそがこの曲の魅力といえるだろう。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo・エ・モルト・マエストーゾ～アレグロ・コン・スピーリト 変二長調、4分の3拍子～変口短調、4分の4拍子 朗々とした主題を持つ華麗で長大な序奏が置かれているが、この主題は以後一度も現れることがない。その意味でこの序奏は独立的な一部分を形成している。主部はソナタ形式、民族的な主題に基づき、ヴィルトゥオジティを発揮するピアノ独奏と雄弁な管弦楽によって劇的に展開する。

第2楽章 アンダンティーノ・センプリーチェ 変二長調、8分の6拍子 ロシア的な情感を湛えた美しい緩徐楽章。中間部としてスケルツォ風の急速な部分（プレスティッシモ）が挟まれるが、これはフランスの小唄を主題としている。

第3楽章 アレグロ・コン・フォーコ 変口短調、4分の3拍子 ウクライナ民謡に基づく主要主題と情感に満ちた副主題とによる民族的かつ名技的なロンド・フィナーレ。最後は変口長調の圧倒的な終結に至る。

(寺西基之)

作曲年代：1874~75年

初演：1875年10月25日（ロシア旧暦10月13日）ボストン

ハンス・フォン・ビューロー独奏

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

カリンニコフ： 交響曲第1番 ト短調

ヴァシーリ・カリンニコフ(1866～1901)は、チャイコフスキーやラフマニノフにもその才能を評価された作曲家だった。夭折したため、作品は多くないが、この交響曲第1番をはじめ、その親しみやすい作品は多くの人の心を捉えている。

1866年1月13日(ロシア旧暦1月1日)、警察官の息子として生まれたカリンニコフは、早くから音楽の才能を発揮し、モスクワ音楽院に入学した。しかし貧しかった彼は、学費が払えず音楽院を退学し、モスクワ・フィルハーモニー所属の音楽演劇学校に移る。この学校では生涯にわたって彼を援助しつづけたセミヨン・クルグリコフ(1851～1910／後にカリンニコフから交響曲第1番を献呈される)など、良い教師たちと出会ったが、学費を稼ぐために、学業のかたわら、オーケストラでの演奏や編曲、写譜など、あらゆる仕事をしなければならなかった。無理がたたたり、カリンニコフの健康は次第に悪化、1887年には結核を発症した。

1892年に音楽学校を卒業すると、彼はチャイコフスキーの推薦で指揮者としての職を得るが、彼の健康はそれを許さず、翌1893年には友人たちの援助によってクリミア半島に移り、療養しながら作曲を続けることになる。ここで彼は主要な作品の多くを作曲するが、1901年1月11日(ロシア旧暦1900年12月29日)、35歳の誕生日の直前に世を去った。

交響曲第1番は1895年に完成した。4つの楽章をもつが、先行する3楽章の主題が終楽章に登場するなど、構成にも工夫が凝らされており、若きカリンニコフの意欲が感じられる。主題は、民謡や民族音楽の影響の強い、親しみやすいものが多い。1897年2月にキエフで行われた初演は成功し、第2楽章と第3楽章はアンコールされた。キエフ音楽協会の議長で、初演を指揮したアレクサンドル・ヴィノグラツキー(1855～1912)はこの曲を愛し、4月にもう一度キエフで演奏したほか、ロシア国内外の各地で取り上げている。ウィーンでの演奏の後、ヴィノグラツキーは作曲者に次のような手紙を送った。「この曲を演奏するといつも、みんなこの曲を好きになります。最も重要なのは、音楽家たちも聴衆もそうだということです」

第1楽章 アレグロ・モデラート ソナタ形式 まず、弦によって民謡風の第1主題が提示され、それをホルンの音型が受ける。この音型は、第1ホルンが半音階を上昇し、第2ホルンは下降するので、次第に音程が開いていく形になっている。第2主題はヴィオラ、チェロ、ホルンによる歌謡的な美しい主題で、背後では木管がシンコペーションのリズムを吹き続ける。展開部は、両主題が次第に高揚し、クライマックスを築いて静かになったあと、さらにフガートの部分があるという長

大なものだ。再現部では、第1主題がオーボエとファゴットで現れ、弦による半音階の音型がそれに応える。第2主題を歌うのは弦だが、提示部とは違い、ハープの分散和音が付いているので華やかさを増している。

第2楽章 アンダンテ・コモダメンテ 自由な三部形式 ハープとヴァイオリンの序奏に続き、イングリッシュホルンとヴィオラがおだやかな主題を歌う。これが繰り返されたあと、東洋的な主題をオーボエが吹き始める。ここからが中間部だ。やがて冒頭主題がホルンで戻ってくると、2つの主題が同時に鳴るエピソード部分となる。最後に主部が繰り返されて、静かに楽章を閉じる。

第3楽章 スケルツォ／アレグロ・ノン・トロppo 複合三部形式 主部は、ヘミオラ（3拍子×2小節を3+3ではなく2+2+2に分割する）や4音による下降前打音などを効果的に用いた、民族舞曲風の生き生きとした音楽だ。4分の2拍子の中間部は、オーボエが哀愁のある旋律を歌う部分が、少し軽快な舞曲風の部分をはさむ形となっている。その後再び主部が戻るが、そのまま繰り返すのではなく構成には変化がつけられている。

第4楽章 フィナーレ／アレグロ・モデラート～アレグロ・リソルト 変奏曲形式 二重変奏曲の形式を取ったフィナーレ。序奏では、まず第1楽章第1主題が弦で再登場する。次に半音階で音程が開いていく音型が出てくるのも同じだが、こんどはホルンではなく弦と木管で、リズムも軽快だ。ただちに主部へ入り、躍動的で明るい第1の変奏主題が弦と木管に出るが、この主題のリズムは第1楽章第2主題から導かれたものだ。クラリネットが吹くニ長調の第2主題は歌謡的で、ハープと第2ヴァイオリンの分散和音に伴われている。楽章はこの2つの主題が交互に変奏されていく形で進むが、途中には第1楽章第2主題や第3楽章中間部の主題も顔を出す。コーダでは、第2楽章主部の主題が金管で壮麗に回想され、輝かしく全曲を結ぶ。

(増田良介)

作曲年代：1894～95年

初 演：1897年2月20日（ロシア旧暦2月8日） キエフ
アレクサンドル・ヴィノグラツキー指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、ハープ、弦楽5部